

R18
Adult only

FUWA MOFU Collection



Full color
Original Comic
あめのちゆき 総集編



PREFACE

はじめまして、こんにちは！
あめとやきです
この本をお手に取っていただき
ありがとうございます☆
新作描きおろしは収録のエクリュさん本の
後日談のいっしょにお風呂なお話です(*´ω`*)
最初のほうはちょっと昔のなので絵柄が結構違って
はかしいですが、看板娘たちの初登場のときを
載せたくて収録してみました！
楽しんでいただけたらうれしいです…！

エクリュさんと一緒にお風呂♡

今日は寒いし
一緒に入るのも
楽しそう♪

エクリュさん
泊りがけの
お風呂に
一緒に入
るの楽し
そう♪

お待ちせ
しました…♡

本当に一緒
にお風呂に
入って
くれるなんて

たゆん♡

イルッ

ドキ♡

そういうことは
後でゆっくり…ね♡

先に背中流して
あげますね

ザッ
ザッ

どこ見てるん
ですか？

もう…！

ドキ♡

ごめん
ちやにっ
目が

そんな…
せつかくだっ
たらエクリ
ュさんの身
体で洗っ
てほしいな

えっ!!
私の…?



こ...これ
いいんですか？

ん

ふ

はあ

ふにゅ ふにゅ♡

やわらかいのが
背中に...

はあ

ん

身体ぬるぬるで...
何だか変な気分にな
っちゃう...♡

ああ...
最高だよー
エクリュさんに
こんなこと
してもらえるなんて

びゅん

ヌル
ヌル♡



俺もエクリュさん
来てくれないかな？

いいですね...

ふふっ♡
ここもキレイに
してあげますね♡

ヌル

たふん♡

しゅこ

しゅこ♡

ムニゅ♡

ヌル

ヌル♡

ムニゅ



ん♡

ムニ♡

くり♡

もう...さつきから
おっぱいばかり
洗って...♡

あ♡



私も身体が
熱くて...
もっとエッチな
こと...して...♡

すん♡

すん♡

は♡

は♡



これって♡
どんどん固く
なってますね

ん♡

ぬる

エクリュさん
俺...!

ぬる

ぬる

は♡

ん

おちん○ん
入っくる…
お風呂
汚しちゃわ
ない
ですか？

あ

ひがし

びん

やあつ…♡
変なこと…
言わないでっ

大丈夫
どんどん
エツチ
な汁
出して
いいよ

ズ
ッ
ッ

ズ
70

い
ち
ち



すし

おっちゃん

$G=2v$

あゝあゝ

42

びく

あ
あ
あ

311

ここ……
声が響いて

はあ

い 恥
っ ず
… か
♥ し
…

しらべ





エクリュ…
出すよ！

ふろん!!

あうん

ビク ビクンッ

あゝあゝあゝ

ビクンッ

そのときは
また…♡

あったかい
温泉にいくのも
いいですね…

チャッ

PREFACE

『100号室のネコ』

2012年9月発行

初の完全オリジナル本はマカロンさんのフルカラーイラストノベルでした！
このころから比べるとマカロンさんは成長した気がします(*´ω`*)
きつとごしゅじんさまにおいしいものをいっぱい食べさせてもらってるんだと思います…！

初めてのオリジナルという事でいろいろと試してみたくてエロゲのような小説とイラストが合体したものにしてみたい、挑戦な1冊でした！
その後いっぱい描くことになったマカロンさんの初登場シーンを見ていただければと思います☆

R18
成人向け



あめのち ゆき / あめとゆき
フルカラー イラストノベル

イチマルゼロ 号室の ネコ





もぐ

もぐ

もぐ

俺、佐藤「ウ」が引越してきたマンションには
ちょっと変わった野良猫が棲みついていた。

見た目は少女だがどうやら突然変異した
ヒト型の猫らしい。

マンションの床下の、1000室

(猫はそう呼んでいるがそんな部屋番には無い)
に住んでいるそうだ。

猫好きの俺は時々餌をあげていた。

初めは俺の「お」を警戒していたが、
数日間待っているとだんだん
なつくようになった。

猫「おながすいた〜餌くれ」

今では向こうから餌を求めてくるように
なってきた。

佐藤「えっ…今これじゃないけど、いいか？」

俺はセガまれて反射的に「おやっ」と驚つてきた
マカロンを渡してしまった。

猫「うん…でもんぐ…」

佐藤「あああ…俺のおやつが…」

佐藤「そっちな…まだこいつに
名前つけてなかったな…」

野良猫なので名前はまだ無く

マカロンがともに入らなみたので

俺は勝手に「マカロン」と名付けた。

佐藤「よし、今日からオマエはマカロンだ。

俺は佐藤「う」だ！よろしくな」

翌日の朝

自分の部屋のはずなのに

違和感を感じて目が覚めた。

佐藤「……ん？」

「なんかふもあたたい……」

……俺の布団の中に半裸の女の子が……

佐藤「うわっ！何でマカロンがここに……っ」

餌付していたから懐いてしまったのか、

開けっ放しだった窓から勝手に部屋に入ってきた

そのまま眠ってしまったようだ。

マカロン「なにやーおにや……もぐもぐ」

マカロンはごろんと俺のほうに転がり

△ニツと柔らかな何かが腕にあたって

ふと腕のほうを見るとそこにはまだかつて

見たことのない絶景が広がっていた。

「……猫のくせになんて良いおっぱい……」

猫だとはいえ見た目はやはりかわいい女の子で、

女子に免疫のない俺には刺激が強すぎる眺めだった。

マカロン「もぐもぐ……もぐと顔をぐぐぐ……」

俺は腕をしっかりとつかまれ、脱出は不可能だった。

もぐもぐもぐもぐと俺の腕を強くつかみ

△ニツと胸を密着させてきた。

これ以上くつかれると、健全な男子としては

もはや限界……

佐藤（よく寝てるしちゃんと触るいいなぞ

良いよな……っ）

そもそも不法侵入してきたのはマカロンだし

俺は寝ぼけていたこともあり

ついついざっかっか湧いてしまった……



まずは指先を恐るおそる

マカロンのおっぱいをじっくり見てた。

・・・ふにゅ

(おっ、思ったよりも弾力がある)

マカロ「ふにゅ...ふにゅ...ふにゅん」

マカロンも俺の動作に反応していたが、

まだ起きそうになかったので

今度は手のひらでおっぱいをつつみ込んでみた。

モジモジ...

佐藤(これは...極上のふにゅに感...！)

手が止まるん)

あまりに良い触り心地に勢いが止まらなくなり、

乳首をくりくりしたりつまんでみたりと

おっぱいの全ても堪能していた

マカロ「あ...ふあ...ふん...ふにゅん」

マカロンは寝ぼけていたが、

声を出して感じてしまっていた。

マカロ「はあ...ふにゅん...」

その敏感な反応を見たとき、俺の理性は

完全に崩壊してしまった。

マカロ「あ...ふん...ふん」

おっぱいを突如とした

薄桃色の乳首を吸おうとした...そのとき-

マカロ「.....ふわ...ふん...ふん...ふん...ふん...」

目を覚まし、恥ずかしくて驚きに顔を真っ赤にした

マカロンと目があってしまった。

(やば...調子にのりすぎた...)

これはまずいと瞬時に戻ったが、

このままだったらもうやめられない。



マカロン「……なんにしろ……」

佐藤「マカロン……もう少しだけ……」

マカロンの口を塞ぐようにキスをした。

マカロン「んんん……はっ……んん」

俺はマカロンの甘い香りに感情が揺るぎ、

マカロンを強引に押さえてくっつく。

マカロン「……何……なんにしろ……なんにしろ……」

唇だけでなぐ、おどろきやうへ、

乳首へと次々とキスをしていた。

マカロン「……なんにしろ……なんにしろ……」

舐めて……んん……どうするの……

あ……ん……恥ずかしい……

佐藤「マカロンがわい……なんにしろ……なんにしろ……」

指先でマカロンの股間に……と触れてみた。

そこは軽く触っただけなのにもう熱くうけていた。

マカロン「ん……なんにしろ……なんにしろ……」

なんにしろ……なんにしろ……なんにしろ……

ア……ん……恥ずかしい……

マカロン「……なんにしろ……なんにしろ……」

俺はもう自分を抑えることができなかった。

俺の中に特別な感情が芽生えはじめていた。

マカロン「……なんにしろ……なんにしろ……」

も……も……なんにしろ……なんにしろ……

べ……べ……なんにしろ……なんにしろ……

ビク……ビク……

マカロン「んんん……はっ……はあ……はあ……」

大きな声をおいてマカロンは抱き寄せた。

佐藤「俺……マカロンと最後まで……」

俺はもう自分を抑えることができなかった。



ずぶずぶにや……にやぶに……

マカロン「んっ……はあ……ん……ふあ……」

きもち……いい♡」

最初はずぶずぶとぎんぎんだった動きも、

今では互いの息がぴったりと

重なり合うほどになっていた。

佐藤「マカロン……可愛い……」

マカロン「んっ……うれい……」

ちや……びちや……

マカロン「んっ……ふっ……んんん」

もう何度目だろう……まをからめキスをして、

マカロンを抱きしめた。

マカロン「き……う……う……う……う……」

佐藤「俺もだよーマカロンの……」

いつの間にか好きになった……離したくないんだ」

マカロン「んっ……ず……」

ずっ……ずっ……ずっ……」

身体が繋がった感じがつかけて

心もつながる事があるなんて、

想像もしていなかったが……

マカロンと同じ気持ちで

共有していることが嬉しかった。

佐藤「マカロン……俺……そろそろ……」

マカロン「お……い……お……ん……ん……」

中で大きくなった……」

マカロン「んっ……い……う……う……」

いいよー今度は……んっ……ふっ……うっ……」

ビクンッ

ビク!

んっ
あ
あ
あ

ビク

ド
ド
ド

ド
ド
ド

ド
ド
ド

■洋服ボツデザイン案→



■2012/03 みみけ用イラスト↓



イチマルゼロ
100号室の
ネコ

■マカロンについて。

2012年3月のみみけっとにて描いたステポの猫耳っこが
意外と気に入った感じだったので、この子をヒロインにお話を
かいてみたいと思ったのがきっかけです！

初めて描いたときにマカロンを持っていたので、マカロンが好物という
設定に・・・そしてマカロンという名前になりました・・・そのままですわ
お洋服もいろいろ考えてみました～オリジナルのキャラデザはすごく
なやむけど楽しいです(*´▽`*)



PREFACE

『チョコミントな猫』

2012年11月発行

チョコミントさん初登場の本です！
マカロンさんのお友達になるチョコミントさん
ですが、初登場は秋だったんですね・・・
なんとマカロンさんの2か月後に新刊出して
いるという！どういう刊行ペースだったんだろうと
昔の自分におどろきです（´□`。）

こちらもかなり前の本なので、いろいろと
違っていますがチョコミントさんの歴史として
楽しんでいただけたらうれしいです＞＜

あめ のち ゆき/あめとゆき
フルカラーイラストノベル

チョコ ミントな猫

R18

成人向け



俺は佐藤コウ。

ちよっと変わった野良猫、

マカロンが住むマンションに

引っ越してきた高校生である。

佐藤(またいる……)

バイトの休憩中は近くの

さびれた公園で時間をつぶすのが

日課なのだが、そこにはいつも

無表情でベンチに座っている

ヒト型の猫がいた。

(見た目は可愛いけど……)

なんか不思議な猫だな……)

俺が近づくと、気配に気づいたのか

俺をじーっと見てきた。

猫「……」

佐藤「……」

猫はチラッとこちらを見ては

何か言いたそうにしている。

猫「それ……おいしそう……」

佐藤「えっ？」

どうやら俺が食べていた

季節外れのチョコミントアイスを

見ているようだった。

佐藤「お腹空いているのか？俺が

食べてるのよかったらあげるよ」

猫「ありがとう……」

そういうとペロペロもしゃもしゃと

食べ始めた。

(ちゃんとお礼をいうところに

違いを感じるな……)

俺は不意にマンションに住んでいる

マカロンと比べてしまった。

佐藤「そう言えば名前

まだ聞いてなかったな……

俺は佐藤コウっていうんだけど

君は？」

猫「……チョコミント」

それは今食べている物なんじゃ

ないか……？

と疑問に思いつつも、

そういう名前なのだと思う事にした。



食べ終わると、チヨコミントはまたぼーっと遠くのほうを見はじめた。(何を見ているんだろう……)とくに話すこともなかったので、俺も隣に腰掛けて一緒に遠くを見ていたら、いきなりチヨコミントが俺の前に立った。

佐藤「? 何かしたのか?」

チヨコミント「おれ……するから」

そう言うとチヨコミントは俺の膝に乗って抱きついてきた。

佐藤「ちよつと待て……!」

どうしてこうなった……?!

突然の行動に俺は驚いてあたふたしてしまった。

身体の小さいチヨコミントは膝に乗っても軽く、女の子らしい甘い香りがした。

チヨコミント「どうしたの?」

そこに落ちた雑誌に書いてあったことをしようと思ったんだけど……?

佐藤「いやいやいや! 違うから!」

どこから? こんでいいのかわからない……」

ヒト型の猫たちの思考はいまだに俺の理解を超えた部分がたくさんある。

チヨコミント「お菓子をくれたから……身体でお礼しないと……」

その雑誌に書いてあったことはエッチな内容だったことは明らかだった。

雑誌を読んで内容を覚えることができた、チヨコミントは利口な猫のようだが、どこかが確実にずれているようだった。

佐藤「身体……そこまでしなくても喜んでくれただけで十分だから!」

何がいけないのかと言わなければならぬ。

チヨコミントは首をかしげていた。



「チョコミント」でもお金持っていないから……何か他で等価交換しないといけないと思うの……」

佐藤「あのお菓子にそこまでの価格はございません」

チョコミントは膝に乗ったまま少しうつむいてつぶやいた。

チョコミント「別にお菓子を

くれたからってだけじゃないから……」

佐藤「えっ？じゃあ他に何が？」

チョコミントは少し停げな顔になりながら、ゆっくりと話した。

チョコミント「コウだから……」

ここに來てくれるのはコウだけだったから……ここはだれも來ないから……」

佐藤「言われてみれば、確かに他に人が來てるのを見たことないな……この公園……もう管理されてないのか？」

コクコクとチョコミントはうなずいた。

チョコミント「コウが近くにいると温くなる……」

もつと温くなりたいから……」

佐藤「それって、もしかして……」

チョコミント「もつとぎゅっ」としていい？」

佐藤「……俺でよければ……」

少しずつ二人の距離が近づいていき、氣付けば二人の唇は重なりあっていた。

チョコミント「ん……」

れちゃ、ちゃ……」

ミントの残り香がするきを

からませ、唇を押しつけた。

チョコミント「んっ……ふ……何か変……」

頭の中まで……温かくなってきた」

佐藤「もつと温くなる方法

……これはどうかな？」

俺はチョコミントのブラワスの

胸のボタンを外し、

すっと服の中に手を侵入させた。



だれも見えていないのを良いことに、俺はちょこミンットのケープを外し、胸元を広く素肌をさらけ出した。ちょこミンットの胸は小ぶりながらもプニプニした確かな弾力があった。ちょこミンット「んっ……あ……不思議……コウに触られると身体が熱くなってくる」小さな乳首を指で転がしてみると、ピクッと身体を震わせ反応する。ちょこミンット「ふぁっ……コウ……おっと私のおっぱい触ってる……そんなにいいの？」佐藤「ああ……おっぱいもいいけどこども……」そつと貴重なものに触るように慎重にちょこミンットの股間に手をすべせこいた。ちょこミンット「あっ……そ……触られると……」何かもつと変にっ……んにやっ」初めての感覚に驚いたのか、急にちょこミンットの全身が反応した。佐藤「ここがちょこミンットの身体を一番温かくしてくれるところだよ……」まだ十分に育ちきっていないちょこミンットの股間にズボンの中の俺の硬くなったモノをこすりあてた。ちょこミンット「コウの私のと違っ……なんかゴツゴツしてる」佐藤「そうだよ……でも猫にはもつと温かな場所があるんだよね」ちょこミンット「ひゃうん……しっぽは……しっぽはダメ……ふにゃあっ」しっぽを触ったとたんちょこミンットは全身の毛が逆立つくらいに反応し、可愛い声で鳴きだした。佐藤（ヒト型猫はここが弱いっつのは知ってたけど、ここまで……ちょこミンットは特に敏感なのかなっ）ちょこミンット「コウ……私ばかりするのはずいぶん……」ちょこミンットに触っていたら、俺も限界になっていった。



佐藤「俺も・ちょコミントと一緒に気持ちよくなりたい……」
佐藤（でも、こんな古いベンチの上で動いたらベンチを壊してしまいそうだ……）
戸惑っているちょコミントがスクッと立ちあがった。
ちょコミント「……こうすれば……入れやすい？」
佐藤「えっ……？」
なんとちょコミントはベンチに手をあて、大胆にも可愛い尻を露出し俺のほうに向けてきた。
雑誌で読んだことをその通りにしてみているつもりなのだろうが、実際やつてみると恥ずかしいらしく、いつもは無表情なちょコミントが頬を真っ赤に染め、目を潤ませていた。
佐藤（くっ……白昼堂々バックでするなんて……）
佐藤「……それじゃ……いくよ……」
背德的すぎるシチュエーションに興奮で声が少し上擦ってしまっていた。
ちょコミント「うん……きて……」
ちょコミントの背後から覆いかぶさり、やつくりと割れ目の中に押し入れる。
ちょコミント「んっ……コウの……あったかい……あふっ」
佐藤（ずいっ！からみついてくる……入っただけなのに……）
トロトロで力強く締め付けてくる……何かを裂いたような感覚の後、俺のモノはぐちゃぐちゃという音とともにちょコミントの大切なところへおさまった。
ちょコミント「いっ……ふっ！……はあっ……はあっ」
華奢で小さな身体には大きすぎる俺のモノを受け入れて、ちょコミントは少し苦しうにこちらを振り返る。



「ううっ……いいよっ……
「この好きなように……して……
「うを……もっと感じたいから」
佐藤「ああ……いっぞ……っ」
もっと思持ちよくなりたいたいという
衝動に駆られ、
「このミントがいいと言わなくても
俺は勝手に腰を動かし始めて
いただろう。」
「このミント」「んあっ……うんっ！
「このが……
「ナカで擦れて……いい……」
「腔内はさつきより随分と馴染んで、
「このミントの声も甘くなってきた。
佐藤「もっ」とよくしてやるからなっ」
「このミント」「にやあっ……んっ！
「さもち……いっ！おちんちんが
奥までささる……んあっ」
佐藤「このミント！
「俺もだっ……」
佐藤（普段何を考えているか
分からないこのミントが
こんなにエッチな姿を俺だけに
見せてくれると思うと……
もっとなメチャクチャにしてやりたいくなる）
「このミント」「んはっ……にやうっ
「頭の中まで真っ白になっちゃう！
「もっ……立つてられない……」
「あまりの快感に足の力が抜けてしまった
「このミントの腰を両手で掴んで
強制的に打ち付ける。
「このミント」「あ……んあっ「この……
「ほい……」
「全部受け入れるから……っ」
「パン・パン……腰を動かす度に響く
卑猥な音がお互いを高がらせた。
佐藤「くっ……もう限界だ……
「出すぞ……中に流し込んでやるっ」
「このミント」「にやあっ……っふあああ
「この精液……いっばい注ぎ込んでっ」
「どくん！と精液が閥をきったように
「このミントの腔内に流れ込んだ。」





しばらくベンチでぐったりと
寄り添って余韻に浸っていた
俺とチョコミントだが、
時計を見るとちやうど休憩時間が
終わろうとしていた。

佐藤「えっと…俺…そろそろ
バイトに戻らないといけないんだ」
チョコミント「……」

戻るという言葉に少し反応した
みたいだったが、視線は相変わらず
どこか遠くのほうを見ていた。
チョコミント「コウがしてくれたこと
ともうれしかった…
また来てくれる？」

佐藤「えっ？」
振り向くと少し頬を赤らめながら
こちらをじーつと見ていた。

「そっか…俺がいなくなると
チョコミントはまた一人に
なっちゃうかな」

佐藤「…ああ！当たり前じゃないか！
お菓子とかも持つてくるよ」
チョコミント「いいの。」

チョコミントの顔がほころんだ。
チョコミントが笑顔らしい表情を
見せるのは初めてだった。

佐藤「…普段とのギャップで
余計に可愛く思えてしまう」

佐藤「住んでる場所も近いから、
公園じゃなくても見かけたら
遠慮なく声をかけてくれ」

チョコミント「わかった…そうする」

そうして俺はチョコミントを
撫でてから、バイトに戻るために
公園を後にした。

佐藤「明日はバイトがないけど、
行ってみてもいいかな…」
ここでの楽しみが増えたことが、
俺は素直に嬉しかった。



にゃーにゃー

バイトから帰ると俺の部屋に
異変が起きていた。
佐藤「ただいまー」
マカロン「おかえりーごじゃんさま」
チヨ「ミント「おかえりなさい」」
佐藤「……」
佐藤「なんか増えてる——」
さっきまで公園にいたチヨ「ミント」が
俺の部屋にいた。
佐藤「どうしてチヨ「ミント」が
ここに……」
公園にいたはずなのに……
チヨ「ミント」「あの後」
マカロン「ごじゃんさまのともだちー？」



どうやってマカロンに説明していいか困っていると、

チョコミントがすり寄ってきた。
チョコミント「コウとずっと

いたいから……

ここにいますことに決めました。

マカロン
うん！許可する！

マウロンがもったいなく、

マカコンのことは先輩と遊ぶことー！

急に先輩風を吹かせはじめた

マカロンだが、

「**チョコミント**はごくつとうなずいた。」

佐藤(ちよつと待てー！)

俺はまだなにも言っていないぞっ

いつもの俺ならそう言うのだが……

マカロンも遊び相手ができて

嬉しいそうにしているし、

チ「コミントの可愛さにす〜かり

氣を許してしまっている自分かいた

佐藤　よし…入居初めに食へ

用意するから少し待て

「……うん」

「マカロンがいいっ」

準備をしに行こうとしたら、

チョコミントがそつと俺の裾を

つかんできた。

佐藤
「どうした？ やっぱりさっきあげた

「チョコミントのほうがいいの？」

「チョココメント」ときどきでいいから……

公園でしてくれたことを

「またしてくれるとうれしい」

チニニミントは頬を赤くして

マナリンに聞こえない声で囁いた

このちよつと変わった「苗たち」こ

奄もさうに褒かれてしまったようだ。

7

★おわり★

PREFACE

『NEKOMAMIRE』

2013年6月発行

マカロンさんとチョコミントさんが住み着いた
お家でのお話です！
女の子のかわいいパジャマ姿とか寝てるところが
好きなので、そんな感じのシーンが多めです

ねこまみれになりたい・・・と思いつつ
猫たちともふもふ楽しく暮らしたくて
描きました(*´ω`*)

マカロンさん本からずっと、ゆるく続きもの
になっています♪

あめ のち ゆき/あめとゆき
フルカラーイラストノベル

ADULT ONLY!
R18



NEKOMAMIRE





俺は佐藤コウ。

二匹のちよつと変わった猫たちに
懐かれ、一人暮らしの部屋に
住み着かれて
しまった学生である。

俺のバイトが終わった後はみんなで
夕飯を食べるのが
すっかり日課となっていた。

夕飯の片付けをしている間に、
二匹は遊び疲れたのか
仲良く一緒に丸まって眠って
しまっていた。

マカロンはフトンからはみ出して
寝ているのに対し、チョコミントは
静かに寝息をたてていた。

マカロン「もにゃ むにゃ・・・もぐもぐ」
チョコミント「すー すー。」

コウ(ずいぶんよく寝てるな～
猫だからヒトより沢山寝るのか?)

二匹のかわいい寝顔をずっと眺めて
癒されるのもよかったが、
明日は朝早いので俺も寝ることにした。

コウ(明日は学校もバイトもあるし、
早目に寝ておくか)



陽が昇り始めたころ、妙な感触がして目が覚めてしまった。
コウ「ん？なんか股間があたたかい...」
チヨ「コミント「ちゃんぽ...んっ♡」
...あっ...おはよう...」
コウ「...チヨ「コミント」？」
朝から何を...うっ？！」
チヨ「コミントが俺の大きくなった下半身をペロペロしていた。
チヨ「コミント「ココが大きくなって...」
いたから...ご奉仕する...」
俺もこの快楽には我慢できず、
チヨ「コミントの舌先に身を委ねていた。
チヨ「コミント「んっ...ちゅるっ♡」
...ヌルヌルしてる♡」
コウ「うううっ！はあ...はあ...」
このまま続けられたら...俺...」
マカロン「ん？二人で何してるの？」
あまりの気持ちよさに
意識を失いかけたが、目を覚ました
マカロンの声で一気に現実へと引き戻された。
コウ「マ、マカロン！？これはだな...」
こんな光景を見られて動揺している俺に
マカロンがもじもじしながらすりよってきた。
マカロン「二人だけですかー！
マカロンもまざりたいよー」
コウ「ええっ」
マカロンが俺の亀頭を舐め始め、
チヨ「コミントが根元の部分を舌で優しくなぞっていた。
マカロン「れろれろ...♡すっごくビクビクしてる...もう出ちゃうの？」
チヨ「コミント「んんっ...♡ご主人様が気持ちよくなると私もなんだか...」
モジモジしているチヨ「コミントをよく見ると下半身のほうからうっすら液体が垂れ始めていた。
コウ「チヨ「コミントもフェラでえっちなスウィッチが入っちゃったのか」



その様子に気づいたのかマカロンが
 チョコミントの湿りはじめていた
 アソコを舐め始めた。
 マカロン「どうしたの? ご主人様の
 オチンチン舐めてただけで
 こんなになっちゃったの?」
 チョコミント「そっ…それは
 ……はうんっ♡」

ちよっと思戯っぽく責めるマカロンに、
 チョコミントは抵抗もできず
 されるがままに局部を弄ばれていた。
 チョコミント「ふあっ♡…はあ…
 んん…お…お返し…」

マカロン「ふにゃっ! 尻尾は…
 尻尾はダメなのにい♡ひゃああん!」
 チョコミントはマカロンのしっぽや
 胸を触り始めた。
 コウ(ごく)…! …これは禁断の…
 ちゃっ、ちろちろっ、ちゃばっ、たらっ

お互いに性感帯と思われる個所を
 ちろちろと舐めあい、弄る光景は
 まさに天国のようだった。
 マカロン「にゃうん! そ…そんな
 ところ…ご主人様にも触られた
 ことないのにっ! ひゃっ!」

チョココミント「べろっ! ソコが感じるの
 知っているから…んんっ♡」
 しっぽも、おっぱいも、アソコも…
 見ているだけで俺もどんどんおかしく
 なりそうだった。
 チョコミント「そこで見ていないで…
 いっしょに…してほしい…」

チョココミントは俺にもまぎってほしい
 という眼で見えてきた。
 マカロン「ふあっ♡ご主人様あー♡」
 チョコミント「…一緒に気持ちいい
 こと…しよ…♡」

その瞬間、理性のリミッターが
 完全に外れ、俺は二匹の身体に
 自分の舌を這わせていた。



◆ チョコミントに触られていたせいなのか、マカロンのアソコはもうぐしょぐしょになっていた。

◆ マカロン「んあああ！もっとおー！

オマンコぐりぐりしてっ♡」

◆ アソコから膨れたクリを優しくなでるとそれに反応してマカロンもビクンビクン反応した。

◆ ぐつしよりと温ったワレメから見えるピンク色の突起がさらに俺を昂らせていった。

◆ コウ「マカロンのここ…エッチな汁が

どんどんでくる」

◆ マカロン「だっご主人様の手…

気持ちよすぎるから…やん♡」

◆ 反対側ではチョコミントとキスを

しながらおっぱいをもみほぐしていた。

◆ チョコミント「ああっ！そこ触られると

…気持ちいい♡」

◆ チョコミントも普段の落ち着いた感じからは考えられないくらい激しく欲望の赴くままに身体を預けてきた。

◆ コウ「チョコミントのおっぱい可愛いな」

◆ チョコミント「んはっ！うっ！うれしい…

もっとかりこりしてるところ…

吸って…♡あああん！」

◆ 舌と手を使って突き出たクリトリスや

割れ目を愛撫した。

◆ マカロン「ご主人様あ♡もっ！

もう…いっっちゃうよあ」

◆ チョコミント「あああん！やんっ！

そんなにされたらっ♡」

◆ イキそうになる姿を見て俺の股間も

ビクビクしていた。

◆ マカロン「ご主人様のも

我慢できないの？」

◆ マカロンはそう言うと、チョコミントと

一緒に足をM字に広げ、自分たちの

アソコを指で広げた。

◆ マカロン「ご主人様の太くて硬いの…」

◆ チョコミント「ココに挿れてほしいの…」



マカロン「ちょコミント」ご主人様……♡

もうギンギンに勃起した俺のモノを一気に裂け目へ突き立てた。

マカロン「んんううう……くあぁっ！」

ちょコミント「あっ……んんっ♡」

ぬるぬるで熱い膣内に、俺のモノがすっぽりとおさまった。

マカロン「んはあっ！はうっん！にやうんん！」

ちょコミント「大きいのが入って

くるっ……ぶはっ♡」

挿入時の激しい快感から、二匹は身体をびくつかせ呼吸は乱れていた。

ずぶっ！すちゃっ！

突き入った膣内で液体がからみついてくるのを感じながら、俺は腰を動かし始めた。

マカロン「んはあああ！ご主人様あ！

もっとお……くううああん♡」

ちょコミント「んにゃ♡ご主人様の

すきなように……あん！

しっ！んあっ！」

俺は腰を振り、二匹に交互に打ち込み、抜いては突きこんだ。

マカロン「ご主人様の刺激が……すごくて

……んんっ！

またいつちゃうよあ」

ちょコミント「くるうっ！ご主人様のが

膣内で暴れてるのがわかるっ」

よがりながら、唇と唇を重ねていた。

マカロン「んちゃー！んんんっ♡」

ちょコミント「ちゃぽっ！くふうう！

んにやうう♡」

俺が突き動かす度に二匹は敏感に反応し、さらに乱れていった。



ちょコメント「こ...今度は私から...」

コウ「...ちょコメント?」

そういうとちょコメントは自分から俺の肉棒を挿し込んでいった。

ぎちっ...ぐぶっ...

ちょコメント「あふっ!もっと大きくなってる...壊れそう...」

は...にゃあっ

ちょコメントは俺のモノを小さい腔いっぱいにはぐえ込んで、腰を動かす。

コウ「ちょコメント...好きだよ...」

ちょコメントのさっきよりもさらに硬く突起した乳首に舌を這わせた。

ちょコメント「あああっうれしい...♡

私も...好きっ♡」

もにゅっ!と、背中に柔らかいものが押し付けられてきた。

マカロン「私もご主人様のが

欲しいよー♡」

コウ「分かったよ...マカロンにも入れるぞっ」

ずぶっ...

今度はマカロンの後ろから挿入した。

マカロン「んんんー!ご主人様...

大好きー♡」

コウ「俺もだよ...」

ずっとなっとな好きだからな」

腔内がキュッと締まって、絡み付いてくるので、俺も限界に近づいてきた。

コウ(くっ...もう我慢できない)マカロン「出しても...いいよっ♡

ご主人様の好きなきときで...

いいからあっ♡」

ちょコメント「ごっご...」

中にほしっ♡♡」



びく

びく



コウ「マカロン…チョココミント

…大好きだよ」

マカロン「あっ♡ああっ♡すきいっ♡

ごじゃじんさま…

だいすきっ…♡」

チョココミント「わたしも…っ♡あ…あっ

あああー♡」

二匹の笑顔を見て気が緩んだのか、
我慢していた快感が濁流のごとく
一気に流れ出る。

どぶっ…びゅっ…

びゅるるっ…

マカロン「んあっ！ああああ

あああんん！」

チョココミント「あ…あっ！あああ

あああー♡」

俺の精液がぐちゃぐちゃになった
腔内を白く染め上げていった。

2匹は熱いものが子宮に届くのに
あわせて、身体をビクビクさせていた。

チョココミント「…こんなは…もう…

…できちゃう…♡」

マカロン「おなかの中…いっぱい

だよ…♡」

俺は腔だけでは収まらず、

2匹の可憐な顔にも

自分の精液をいっぱいにぶちまけた。



マカロン「んはっ！白いの……

いっぱい出たわ♡」

チョココメント「ネバネバして……それに……

ご主人様の臭いがする……」

コウ「ん……ごめん……あまりに

気持ちよかったから……つい」

急いで拭こうとしたが、マカロンが

自分についた俺の精液を舐め始めた。

マカロン「とうなくともいいよ！

ご主人様のミルクは全部

自分で舐めたいし」

チョココメント「ご主人様のモノで

キレイなモノなんてない」

コウ（くー……なんて可愛いんだー）

ぺろぺろ舐めている姿を見ると今日も

頑張る気力が湧いてきた。

コウ「ん？今日？」

とても大事なことを忘れていたような

気がして、今日は何の日か

よく考えてみた。

コウ「あああああ——

——っ！」

チョココメント「どうしたの？

いきなり大きな声を出して」

時計を見るまでもなく、遅刻なのは

明らかだった。

一時間目は間に合わなくても、

せめて二時間目までにはと思いいながら

急いで制服を着た。

マカロン「おおっ！今日のご主人様は

朝から素早い！」



コウ「悪いっ！これから学校に行ってくるから、ごはんは冷蔵庫にあるもので我慢してくれ！」

いつもは朝ごはんを食べてから出かけるのだが、今日は食パンだけ持って学校へ行くことにした。

コウ「遅刻！遅刻……！」

マカロン「いつてらっしゃい！ご主人様
チョココメント「曲がり角で転校生と
ぶつからないように
気をつけて……」

ボタン！俺は急いでドアを開めて走り出す。

家に残った二匹は、というと……

マカロン「さういえばガッコウって

なんだろうね？」

チョココメント「分からない……」

ご主人様はそこで何を
しているのか確かめる
必要がありそう……」

END

PREFACE

『クラスメイトな猫』

2014年4月発行

黒猫なクラスメイトの『杏ココア』ちゃんのお話です☆
ちょっと小悪魔な感じの子です。

このころはちょっと大人っぽい絵柄にチャレンジしたくなってたみたいで、等身とかも今より高めですね！塗りも新しい感じを模索中な感じがします～

学校の保健室ベッドってなぜか憧れだったので、保健室Hになっています(*´ω`*)



R18
Adult Only

あめのちゆき／あめとゆき
フルカラーイラストノベル
2014

クラ
ス
メ
イ
ト
な



俺は佐藤コウ。
二匹のちよつと変わった猫たちに
懐かれ、一人暮らしの部屋に住み着かれ
しまった学生である。

とある日の放課後、オレは担任に頼まれた用事を済ませるために保健室に向かっていた。

「コウ」失礼します。先生から書類を渡すように頼まれたんですが……」

返事はなかった。机の上には「外出中」という紙が置いてあった。

「

（なんだ留守か……すぐに戻るだろうし寝て待つか）

二つあるうちの一つを使おうとしたところ、隣のベッドから女の子の声が聞こえてきた。

「……んくっ！
 ？？？

はあ
・
・
・
はあ
し

（ん？ずいぶん苦しうだけど）
あまりにも辛そうな声だったので、
様子を見ようと思った。

木

「コウ、大丈夫か？先生を呼んでよう
・・・かっ？！」

・かっ？！

カーテンを開けたところ……
ココア 「コ……コウ君?！」

うしなななは？

声の正体はクラスメイトの
杏ココアだった。

ココアだった。

ココアはさつきまで何と自分のアソコを
いじっていたみたいで、股間は
グシヨグシヨになっていた。しかも・・・

グシヨになつていた。しかも……

コウ「何で耳が？それに尻尾まで……！」
ココア「春になるとね……元の姿に

「春になるとね……元の姿に

戻っちゃうことがあるの……

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

でも大丈夫！こうして気を
紛らわせば：はうんっ♡」

「あらわせば・はうんっ♡」

(優等生のココアが
実は猫だったなんて……！)

猫だっ
たなんて……！)

くちやくちとココアはまた自分の
アソコをイジリ始めた。



ココアは慣れた手つきでアソコとおっぱいをクリクリしていたが、俺の方を見て動きを止めた。

ココア「…何ジロジロ見るのよ？ 恥ずかしいから早く出て行ってくれない？」

コウ「いや…ココアの猫耳がかわいいなっ…」

猫好きの俺には不覚にも女の子のオナニーよりも黒髪に生えた猫耳がとて魅力的に見えた。

ココア「…/// いきなり変なこと言わないでよ！ そんなこと言うなら少しは協力しなさいよ！」

そう言っココアは俺をベットに押し倒しズボンをおろして股間をさすり始めた。

ココア「すごい…オチンチンっ」

こんなに大きくなるものなの？」

コウ「ちょ…マズイっ」

ココア「大丈夫よ…この時間はしばらく戻ってこないって知ってるから…」

剥き出しになったオレのモノはココアの小さな口では収まりきらないくらい大きくなっていた。

ココア「んんっ ちよっとあ…Hな汁

いっぱい出ちゃってるじゃない♡」

ココアは舌で亀頭の部分をペロペロしながら手で竿をしゃごいていた。

ココア「んう…れる♡ あふ…ズズッ」

(ああ…そんなに勢いよく吸われると)俺も反撃したくなっココアのヌルヌルになったアソコに指を入れようとした。

ココア「んっ！ ドコ触ってるのよ？

ひゃう♡…ああッ♡」

(すごい反応だ…ひょっとしてココアってものすごくHな子なのか…？)人差し指で膣内を圧迫していると、指の付け根部分で触れていたクリトリスがビクビクしているのが分かった。

ココア「ひあああんっ♡」



数回痙攣したあと、ココアは潤んだ目でオレの方を見た。

ココア「うー コウ君より先に
イッちゃうなんて・・・」

まだ物足りないのかココアの尻尾が
巻きついてきた。

「コウ・ココア……」

本音を言うとい俺も我慢がでしなかつた。

ココア「最後までしたいの……ダメ？」

コウ……いいに決まってるじゃないか」

ココア うん♡ コウ君……

私の初めて……受け取って♡」

ココアはそのままオレにや
ゆつくりと腰を落とした。

ココア 「うッ！んんっ！っっう…」

本当に……入っちゃった」

ココアーんっ♡
…初めてなのに

入っただけでこんなに感じちゃう

なんて……またイチャイチャうー

オレは落着かせるために三三下の
手を握った。

俺が下から突き上げようとしたら、

ココアがやつくりと動き出した。

ココア 動いちゃだめえ
...

私が：リードして……。っ コウ君の

精子たくさんもらうんだからあ

奥におたるたひにかわいし声を上げて

コ
コ
ア
「なんつこやあ♡」

気持ちいいよ
♡

俺の方は限界を通り越し、いつ射精してもおかしくない状況だった。

コウ「ココア…もう出すから」

抜いてくれっ」

ココアはその言葉を聞いてさらに
激しく動いた。

ココア「やだあ……中に出すのー♡」



膣がキュッと締められ奥から愛液があふれてきた。
ココア「きちゃう…ああっ♡」
おっぱいが跳ね上がるくらい、ココアは大きく反り返った。

びゅるるっー！

ココアのおそこは全てを受け止めきれずピンク色の入り口から白い液体が溢れ出てきた。

ココア「ふぁ…あ…ああっ♡」

ココアは快感のあまりしばらくトロトロになつていた。

そして愛液の混じった精液を手に取りペロッと舐めた。

ココア「…変な味…いっぱい出すから溢れちゃってるよ…」

そう言つて溢れ出る精液をすくつては胸やおへそに塗りたくった。

ココア「マーキングしちゃった…」

これで全部ココアのものだよ♡」
精液まみれとなつたココアはにっこりほほ笑んだ。

(か…可愛過ぎる！)

ココア「ココアにもマーキングしちゃうね」

チュッとキスを求めた。

ココア「ん…ふう♡うれしい…さつきもココアのこと考えてオナニーしてたんだから…」

そういつてココアはぎゅっと抱きついて俺の胸に顔をうずめ、くんくんしてきた。

ココア「ココア…いいにおい♡」

俺は頭をなでようとしたところまだ耳があることに気づいた。

(もしやまだ満足してないのかなー？) もっとココアと続きをしたいと思います、俺のモノも同調したように元気がなってきた。



ココア「うそっ？また大きく？」
コウ「だってココアもその姿のままで
ことはもっとしてほしいんだろ？」
図星だったみたいでココアは
赤くなって押し黙った。

コウ「ココアとだったらいくらでも
続けたいー」
ココア「でもっ！こんなに続けて
されたらー」

返事を聞く前に今度は俺がココアを押し
倒してじゅるじゅるになったアソコに
挿入した。

ココア「ひにゃあーらめっ！
強引すぎっ！...だよあ」

ココアはビクビクからだを震わせながら
抱きついてきた。

ココア「あああ...イッてるのに...
もっと欲しくなっちゃう♡」

コウ「ココア！こんなのはどうだ？」
オレは緩急や角度を変えたりして、腰を
動かした。

ココア「この角度だと...あ...
ぐちゃぐちゃってえ」

おま〇こ掻きまわされちゃう♡
コウ「ココア...」

愛おしそうに巻きついてくるココアの尻尾
を掴んで、しごくように引張ってみた。

ココア「やんっ！しっぽ...りやめえ
さもちよすぎでだめえ♡」

（うっ！また締め付けが）
ココア「あゝ、さっさから
いきっぱなしだよ♡」

コウ「ココア！俺もう...」
ココア「うんっ！出してー！いっほい
ほっころ♡」

コウ「ココア...」



ココア「にやっ…」

あ—————「♡♡」

びゅん！びゅん！

2度目は奥で出してしっかりと膣内に注ぎ込んだ。

ココア「また中に…あついのが…きてるよあ♡んく♡」

2回もしてしまったので、一瞬気が抜けてココアの胸の中に顔をうずめた。

（あ…すぐくやわらかい）

コウ「あれ…本当に元の姿に戻ってる」

ふとココアを見ると、人の姿に戻っていた。

ココア「言っただけよ。こうすれば大丈夫っ」

俺が賢者タイムに入っていると、ココアが擦り寄ってきた。

ココア「おえ？もっ…と…して♡」

コウ「えっ？もう尻尾もなくなっ…たし…」

それにそろそろ先生も戻ってくるんじゃない？」

（ないか？）と言いかけたオレの口を

ココアがキスで塞いでした。

ココア「まだ平気よ。コウ君となら…」

見られてもいいから」

そしてまたギシギシとベッドの軌音が夕暮れの保健室に響き始めた…

食堂



「やばい！すっかり遅くなってしまった」
結局先生が戻ってきたのは、行為を終えた後だった。

ココアは先生が来る前に保健室から出ていった。

ココア「ありがとね、また今日みたいに
なった時は……」

ココア「ん？何？……」

最後のほうがよく聞き取れなかった。

ココア「何でもない！また明日！」

ココアは早足で昇降口の方に向かっていった。

オレもすぐに帰ろうと思ったが、あれだけ運動したので少し小腹が空いてしまった。

ココア「……学食はまだやってるかな？」

この食堂は夕方まで余の余りを売っているの、帰る前に少し食べようと思って立ち寄った。

マカロン「コウだっ」

チョコミント「コウ……遅い……」

ココア「えっ！？」

（なんでココにこの二匹がいるんだ？）

確かオレがこの学校に通っていることは知らないはずである。

チョコミント「コウの匂いを辿って

いたらここにいた」

マカロン「おいしそうな匂いがしたから入ってみたー」

そうだった。家でじっとしていることなんてこれまでなかったじゃないか。

食堂のおばちゃん「ちよっとアンタ！

この子らの食べた分ちゃんと

払いなさいよ」

ココア「え……？」

（タダ食いしてたのー?!）

【続く…かも】



Trick or Treat!!

AmenochiYuki by Yuki Ameto 2013

PREFACE

『Usamimi♥Graffiti』

2016年11月発行

もふもふたれ耳うさぎのぶらんちゃん初登場の本です♪

ラフ本と合体だったので、短い漫画ですが
ぶらんちゃんの見え目とか性格とか、
ふわふわベレー帽とかお気に入り
その後ちゃんとした本を描きました(>ω<)ノ

寒くなってきた時期に、かわいい冬服のもふもふ
した女の子とあったかくなりたいな～と思って
描きました♡

Usamimi♥ Graffiti

Full Color Comic + Rough Illust Book
Ame nochi Yuki by YukiAmeto



R18
Adult Only!

わあ
もふもふ♡

クレインゲーム
上手なんだね！
ありがとう♪

もー
うー♡

でも……こんな
でっかいヌイグルミ
持って買い物するの
大変だぞー

今日は彼女の
「ぶらん」とデート

ぶらんの家に置きに
行こうか？
ここから近いし

うん……いいけど
ちよつと
寄るだけだよ？

ふん

あ……
あんまりじろじろ
見ないで……
はあかしいよ

ドキ
ドキ

ぽんぽん

ふええっ?!
買い物行くんじゃない
なかつたの……?

終わったら
行くからさ……

くちゅ
くちゅ

ナカ……うずうず
しちゃうよあ♡

そこ……
いじられると♡

っ
コリッ

今日は私が
いれていいかな...?

んっ♡

はぁ♡

すっぴん♡

ぐちゃぐちゃ♡

あ♡

はぁ
はぁ

うん
なんかい
いいよ
積極的
だね...

スミ♡
すま♡

ぶるん♡

あ♡

付き合っ
てから
こんなに
エッチに
なっちゃ
ったんだ
よ...
責任と
つてよ...
おっ♡

ふっ♡



あッ♡あッ♡

あッ♡あッ♡

あッ♡あッ♡

いっぱい
しちゃったね...

買い物より...
もつと
くつと
いたいかも♡

END♡

PREFACE

『メイドぶらんはいかがですか?』

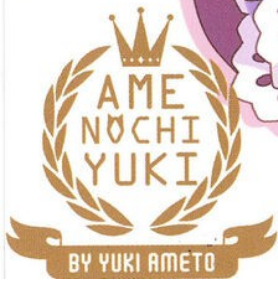
2017年10月発行

このあたりから最近の感じになります!
秋色メイドのぶらんちゃん本です☆

銀髪と赤い目の子が大好きなのですが、
ワインレッドのメイド服と合わせたら
かわいくなったんじゃないかなと思います～

ぶらんちゃんはふんわりした性格なのですが、
うさぎなので大好きな人の前では積極的に
なるところもポイントです(*´ω`*)

メイ
に
ぶ
ら
ん
は
い
か
が
で
す
か
?



Full color
Original book

R18
Adult only









うう...そんなとこ
あんまり見ないで...

もうこんな
濡らして...
ぶらんは
えっちな
だなあ

だつて...
好きすぎて
こうなっ
ちゃうん
だよ♡

最後まで...
してほしいな♡

くっ♡





ふあふ



あこ

もう・・・
イっ
ちや
うっ
♡

あ

ふあふあ♡♡

ひゃくろく

ひええっ
今戻りますっ！

休憩時間
過ぎますか？
大丈夫ですか？

シンシン

END ♡

PREFACE

『ふわふわお姉さんは好きですか?』

2018年4月発行

エクリュさんはぶらんちゃんのお姉さんで
とっても優しくふわふわのうさぎ耳の
女の子です♪

いっぱい癒されたいときに甘やかしてくれる
お姉さんがほしい・・・と思って描きました～

フルカラー漫画は塗りとか時間はかかりますが
やっぱり楽しくて好きなのでこれからも
描きたいです！

こちらのエクリュさん漫画は最初の描きおろしの
前のお話になっています♡

Full color Original book

R18

Adult only

ふわふわ
お姉さんは好きですか？



BY YUKI AMETO

うふふ
別におれなんて
いいですよ

きつとエクリュさんと
付き合う人は
幸せ者だろうなあ…

ふき

ふき

ちゃんとした
ご飯を食べてほしい
だけですから

ご馳走様でした

エクリュさん…
いつもおいしいご飯
ありがとうございます

近所のエクリュさんは
俺が子供の頃から
弟みたいに可愛がって
くれていた

今でもこうして一人暮らしを
始めた俺に料理を作り
来てくれたりする

んキッ

えっ…
でも私…

キラ♡





こういうところまで
お世話したいんです……♡

駄目ですっ

ふぉん

エクリュ
さん……!

そこまでして
くれなくても……

しゅん
しゅん

ゼク
ゼク



もう……♡
本当に
おっぱいが
好きなんです
ね

エクリュさんが
こんなエッチな
下着つけてるから……

やつ……あまり
見ないで
ください

ここに
来る時は
嬉しくて
つい……♡

もじ

もみ

ちゅわ
ちゅわ



私にも...して
ほしいの...♡

力を抜いて...
エクリュさんが
痛かったら止めるから

アル

ん♡

はい...

アルッ

それと...
エクリュさん
じゃなくて
エクリュって
呼んで下さい

ちゅ♡

はい♡

分かった...
挿れるよ
エクリュ

ああ♡

ズンッ



こんな時に
言うなんて
おるいっつ...

もうっ♡

エクリュ...
かわいいよ

あ♡



気持ち...っ
いいですか
...?

んあ♡

ん♡

だっ...
嬉しくてっ♡

ん♡

エクリュ!
いいよ

名前呼ぶと
さらに
締まるっ...

ズッ

ズッ

ビュッ

ズッ

ズッ

ん♡





POSTSCRIPT

ここまでお読みくださりありがとうございました！

はじめてのオリジナル総集編ということで、
すごくなつかしい気持ちになりながら編集しました

はじめてのオリジナル本を出したときにいただいた感想が
うれしくて、ここまで描き続けられたんだなあとしみじみ
……応援してくださる方に感謝です(*´ω`*)

これからも看板娘やオリジナルの子たちを
いっぱい描いていきたいです

よかったらこれからもうちの子たちを愛でてくださると
うれしいです～！
twitterなどでもいつも感想など、とってもはげみになっています♡
ではではまたお会いできましたらうれしいです(・v・*)

2019 あめとゆき

★FANBOXはじめました！
限定プレゼントやショップ
など企画中です



あめとゆきFANBOX
<https://www.pixiv.net/fanbox/creator/92891>

2019/12/30

発行人 あめとゆき発行 あめ のち ゆき

印刷 大中本印刷様

<http://amenochiyuki.blog43.fc2.com/>
rain18snow@yahoo.co.jp

本書の未成年の購読・無断転載・複製・
複写・アップロード等を禁止します

★Twitter でラフ掲載や最新情報の
お知らせなどしてます ID: @ameto_y
ピクシブでは新作絵などを
公開してます pixiv ID: 92891

♡ エクリュさん新作描きおろし漫画と

【あめ のち ゆき】フルカラーR18

オリジナル同人誌7冊を収録した総集編です♡



♡ 描きおろし エクリュさんと一緒にお風呂 ♡



Full color Original Comic